シリーズ
成田市
50年

⑨国際文化都市の創造
（昭和53～58年）

国際文化都市の建設と新たなコミュニティづくりを目指して

成田国際空港が開港した翌年の昭和54年4月、3期目を迎えた長谷川市政は、空の表玄関にふさわしいまちづくりを目指すとともに、世界各国との国際交流や文化交流を推し進めました。

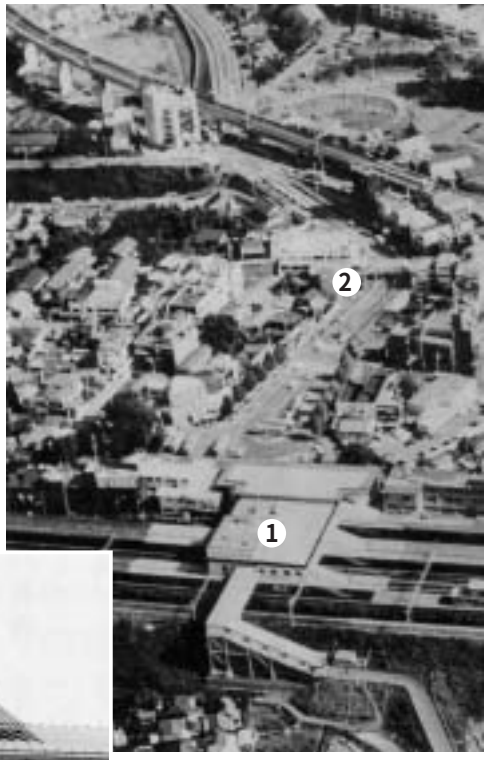
成田ニュータウンでは、急激な人口増加が見られ、新しい地域社会が形成され始めました。一方、市民の余暇活動が活発になり、公民館施設や多目的スポーツ広場などの教育施設の充実が図られた年でもありました。

成田の表玄関

国鉄成田駅の新駅舎が完成する

長い間市民が待ち望んでいた国鉄成田駅の橋上化が昭和54年4月に完成。44年前に建設された旧駅舎の老朽化、空港へのアクセスの一つとして、また1万人を超えたニュータウン地区や囲護台地区からの駅利用者対策の面からもとても重要なものでした。これにより駅前広場と西口は自由通路で結ばれ、並木町や馬橋（囲護台踏切）を経由せずに市街地に出られるようになりました。

しかし、成田ニュータウンは駅までの路線バス（昭和48年から運行が開始）が少なく、駅前は未整備のため、61年の西口駅前広場の完成まで、市街地に出るにも不便な状態が続き、陸の孤島と呼ばれたものでした。



完成した新駅舎①と駅前から国道51号に通じるアクセス通り②

旧国鉄成田駅の駅舎

成田―大室間に定期バス

中郷・久住地域住民の願いがかなう

騒音対策の一環として、京成成田駅から寺台・赤荻・西和泉・久住を通り大室までの約14kmに、1日8往復の定期バスが開通したのは昭和53年10月18日。全線を約40分で結び、駅までの買い物時間などを大幅に短縮させました。

沿線の住民のみなさんは、この日のために道路周辺の草刈りや伐採作業など惜しみない奉仕活動の末にできたバス路線でした。年間4万4千人の利用客が見込まれ、周辺地域と経済交流など大きな期待が寄せられました。

大室青年館前での出発式（昭和53年10月18日）

外国語教育と国際文化交流

外人講師・ホームビジット制度がスタート

国際文化都市を目指す市では、子どもたちに国際感覚を身に付けてもらおうと、昭和57年4月から外人講師による英語の授業がスタート。また、日本の伝統文化を知ってもらおうと成田ユネスコ協会による国際文化交流、外国人観光客に市内の家庭を訪問させて、素顔の日本家庭に触れ親善を深めるホームビジット制度も始まりました。

外国人講師第1号のスタブ先生（アメリカ）の授業に耳を傾ける西中学校1年生（昭和57年4月）

日本語と外国語が飛び交いながらの楽しいお琴の教室（昭和57年10月）

三大記念建設事業に着手

スポーツ・文化交流を大いに盛り上げることに

昭和57年の3月議会で、体育館・陸上競技場（メーンスタンド）・図書館が、市制施行30周年記念建設事業として、59年度の完成を目指して着工されることになりました。同時に、老人大学校（現生涯大学校）や公民館2館の建設も決まり、大型建設事業が目白押しとなりました。

三大施設の規模は、当時の市町村が建設するものでは最大級のものでした。県内はもとより全国規模でスポーツ交流が図られることになり、また、市民の学習意欲や文化的交流を大いに盛り上げることに期待が高まりました。

中台運動公園内に建設中の県下一の体育館

第1回ニュータウン秋祭り

家族連れで1日中楽しめるお祭り

全国各地から集まるニュータウンの人々。昭和46年から入居が始まり、ふるさとづくりには祭りが一番と、49年の夏、第1回盆踊り大会が行われ、55年には規模を拡大し「ニュータウン秋祭り」と名称を変えました。アトラクションは神輿（みこし）、山車、花火大会、郷土芸能大会と盛りだくさん。また、各自治会・町内会では自慢の出店が軒を並べ、威勢のよい声が響き渡りました。その後、「成田ニュータウン祭」「成田ふるさと祭」と名前を変えながらも年々盛んになり、今では、夏の一大イベントとなっています。翌56年には、地域のコミュニティ活動を促進するための活動助成金制度も新設され、地域の活性化が図られるようになりました。

お祭でふるさとづくり（中台小学校建設予定地・昭和55年9月27・28日）